

# 保育実践を核とした保育者養成の在り方

The training of the expert for early child education and care based on practical knowledge

源 証 香\* 小 谷 宜 路\*\*  
Satoka MINAMOTO Takanori KOTANI

## I 研究の目的

幼稚園教員、保育士ともに、その資質向上が求められるようになって久しい。例えば、2006年に文部科学省の示した幼児教育振興アクションプログラムでは、「幼稚園教員の養成・採用・研修の各段階における施策を充実させ、教員の資質及び専門性を向上させることにより、幼児教育の水準の維持・向上を図る」としている<sup>1)</sup>。また、2008年改定の保育所保育指針においても、「保育所は、質の高い保育を展開するため、絶えず、一人一人の職員についての資質向上及び職員全体の専門性の向上を図るよう努めなければならない」という項目が追記された<sup>2)</sup>。保育に携わる者が自己研鑽を積むことは、実際の保育現場に身を置く専門職として、至極当然のことである。また、そのための条件整備がなされることも重要であることは言うまでもない。

保育者の資質に対して言及する動きは、日本国内に限ったことではない。子どもの権利条約<sup>3)</sup>に基づき設置されている『国連・子どもの権利委員会』では、「すべての職員が、この年齢層の子どもとともに働く訓練を受けることが必要」であり、「子どもの権利および発達について健全なかつ最新の理論的および実践的理解を有しており、子ども中心の適切なケア実務、カリキュラムおよび教授法を採用し、かつ、専門の職業的資源および支援にアクセスできることは、必要不可欠である」としている<sup>4)</sup>。また、欧州評議会の閣僚委員会は、「保育者は、すべての子どものケアおよび教育のための適切な知識およびスキルを身につけられるよう、専門的訓練を受けるべき」であり、「高い自己期待を持つこと、同僚とともに定期的に自分の実践を振り返ること、および、さらなる訓練および専門家としての成長のための機会を提供されることを確保するための措置がとられるべきである」と勧告している<sup>5)</sup>。

ところで、保育者は、養成校を卒業し保育現場に勤務した初日から、保育の専門家として実践にあたっていかなければならない。そのためには、就職時が資質向上の出発点ではなく、それ以前の養成段階において、保育現場で求められる基本的な資質・能力を的確に捉え、それを学生が身につけておく必要がある。保育者養成校の教員は、自身の「研究」活動を基盤として、「養成(学生の教育)」を担う。養成の基盤でもある研究については、その質を高めるために、実践から立ち上がる研究を重視すべきという主張がなされている<sup>6)7)</sup>。ただ、これらの議論は研究者の内省から語られるものが主であって、実践者の側から実践と研究との関係について語られることは少ない。「保育者養成」の基盤となる「保育研究」、さらに「保育研究」の基軸となる「保育実践」と

\* 洗足学園短期大学

\*\* 埼玉大学教育学部附属幼稚園

いう関係があることを認識すれば、自ずと、実践の立場から養成にアプローチすることの重要性も見えてくる。

これまでも、保育士や幼稚園教員が保育者養成に携わる機会として、「実習」という場があった。実習は、より実践的な力の獲得が主たる目的であるが、保育現場で期待する資質・能力の全てを限られた実習期間で身につけることは容易なことではない。幸い、筆者は2007年度より、保育者養成校において授業を担当する機会を得、保育士・幼稚園教員として実践を経験した立場から授業を試みたいと考え、取り組んできたところである<sup>7)</sup>。本稿では、その授業を自己分析することで、保育経験者が自身の保育実践を核として養成に携わることの意義と課題を考察する。分析1では、授業の内容と方法を整理し、自身の授業がどのような要素を含んでいるかを検討する。分析2では、受講した学生の自由記述を分析1に対応させて整理し、授業の効果等を検討する。

なお、本稿は、保育者養成にかかわる授業についての自己評価の試みでもある。保育士は、「保育の計画や保育の記録を通して、自らの保育実践を振り返り、自己評価することを通して、その専門性の向上や保育実践の改善に努めなければなら」ず<sup>8)</sup>、また、幼稚園教員は「幼児の実態及び幼児を取り巻く状況の変化などに即して指導の過程についての反省や評価を適切に行」わなければならない職とされている<sup>9)</sup>。自分の実践を振り返り、次の実践に活かしていくことは、保育の基本であり、保育者養成にかかわる授業に場を移しても、同様の姿勢でありたいと考える。

## Ⅱ 分析1－授業内容及び方法の検討

### 1 方法

分析の対象は、筆者（授業者）が担当した「保育原理」（短大1年）、「保育内容・人間関係」（大学2年）、「保育内容・言葉」（短大1年）、「保育指導法」（大学3年）である。いずれも、初めて担当する授業であり、どのように授業を組み立てるか、試行錯誤のなかでの実践であった。当然、シラバス等により事前に授業の全体計画は示してあるが、保育実践と同様、学生の「実態」に応じて、授業の内容・方法を修正していったため、全授業終了後、再度の振り返り・分析を行った。

まず、各回の授業が、どのような内容・方法であったかについての一覧表を作成した。そのうち、大局的な視点から、同じような内容・方法を採用している授業部分を整理、分類した。

### 2 結果

作成した一覧表が下記の表1～4である（なお、紙面の都合上、一部を掲載した）。授業の内容・方法を類型化した結果、4つの授業内容に大別することができた（表5）。以降、便宜上、A型～D型とする。表中にはA・B・C・Dとして表記した。

保育実践を核とした保育者養成の在り方

表1 「保育原理」の授業分析

回	授業内容	授業方法	分類
1	・保育についてどのようなことをイメージするか	記述・発表	BC
	・「保育」とは何をすることか	講義	B
	・大学で「学ぶ」ということを捉え直してみる	講義	CD
	・保育について、現段階でどのような疑問があるか	記述・提出	BC
2	・疑問をもったことに対して、自分で考えてみようとする大切さ	講義 (前回提出を受けて)	BC
	・「遊び」について：自分自身の子ども時代にどのような「遊び」経験があるか それぞれの「遊び」にはどのようなおもしろさがあるか	グループ討議	CD
	・グループ討議のまとめと自分の気づきをまとめる	記述・提出	C
3	・子どもの発達を支えるには①：保育の質と子どもの発達について (アメリカでの調査研究と日本での実践報告を資料として考える)	講義	B
	・調査研究に対する考えをまとめる(保育の質と保育者との関係性を中心に)	記述・発表提出	BC
4	・子どもの発達を支えるには②：子ども理解について (一つの場面を、子ども・保護者・保育者の立場から捉えてみる)	講義(実践事例から) 記述	A C
	・様々な保育形態とその意義はどのようなものか(一斉保育・自由保育・統合保育・縦割り保育など〇〇保育と総称されることの良さと課題を考える)	講義	B
6	・これまでの子どもとのかかわりから捉えた各年齢の特徴	発表・記述	C
	・子どもの年齢と保育の実際	講義(実践事例から)	A

表2 「保育内容・人間関係」の授業分析

回	授業内容	授業方法	分類
9	・保育内容とは(何をするかでなく、何が育ったか・育てたいかを考えることが大切)	講義	A
	・保育に関する法令(なぜ法令を知る必要があるか→専門職としての基礎であるから)	講義	B
	・5領域15のねらいを、自分が達成できているか自己採点する(理由も含めて)	記述・提出	CD
10	・大学で「学ぶ」ことの意味(勉強の仕方を変えてみる必要性)	講義	CD
	・プロとしての自覚(文字の書き方・用紙の提出の仕方)	(前回提出を受けて)	BD
	・けんかの仲裁、保護者との関係づくりはどうあるべきか	C	C
	・「ねらい」とは ・「内容」とは	講義	A
	・領域「人間関係」の「内容」項目を実現している/していない生活場面を考える	記述・提出	CD
11	・学生生活を振り返る必要性 ・自分の親・家族への感謝	講義	D
	・保育者の責任とは(全ての生活が保育に通じた見方になる)	(前回提出を受けて)	B
	・保育内容の実際①：「個の充実」に関する幼児の姿	講義(実践事例から)	A
	・最も印象にある過去に読んだ本、最近読んだ本、関心のある社会問題は何か	記述・提出	BC
12	・他の学生の関心ある社会問題は何か：報道の影響との関連	講義(前回提出を受けて)	BC
	・保育内容の実際②：「関係の充実」に関する幼児の姿	講義(実践事例から)	A
	・大学入学前、入学後での保育に対する見方に変化があるか、今後の将来像はどうか	記述・提出	D
13	・保育職の専門性とは(規制改革会議、保育制度改革の動向から)	講義・記述・提出	BC
	・幼稚園と保育所との違いはあるか	講義(前回提出を受けて)	A
	・保育内容の実際③：「社会性の獲得」に関する幼児の姿	講義(実践事例から)	A
14	・これまでに挙げられたテーマ(学生それぞれから)のうち、一つを選び、考え合う (例) 人との関係のつくり方、保育者を目指す理由、ユーモアを身につけるには	グループ討議	C

保育実践を核とした保育者養成の在り方

表3 「保育内容・言葉」の授業分析

回	授業内容	授業方法	分類
6	・保育者の関わりと言葉 ①：言葉にならない言葉をどのように保育者が感じるか ・子どもの行動にはすべて意味があるということ	講義（実践事例から）	A
7	・保育者の関わりと言葉 ②：保護者への対応と自身の言葉 ・学生時代に何を身につけておかなければならないか	講義（実践事例から） 記述・提出	CD BD
8	・他の学生の考えを聞き、自分の考え方を照らして見直してみる ・児童文化財 ①：紙芝居・わらべ歌・劇	講義（前回提出を受けて） 講義（実践事例から）	CD A
9	・児童文化財 ②：絵本 ・絵本で子どもの集中力は養われるのか ・絵本の前に手遊びは必要なのか	講義（実践事例から） グループ討議・発表	A CD
10	・児童文化財 ③：言葉遊びから膨らむ子どもの遊び（歌づくりの展開、かるたづくりのきっかけと展開、すごろくづくりと遊びの展開など） ・保育は何かをさせることではない	講義（実践事例から） 講義	A BD
11	・素話の実際：〈発表者〉自分の声を知る、教材研究を行い、お話のポイントを掴む 〈聞く側〉発表者の表現の良さや課題を捉える	事前の練習・発表・ 学生間での相互評価	CD
12	・素話の実際：第11回からの継続	事前の練習・発表・ 学生間での相互評価	CD

表4 「保育指導法」の授業分析

回	授業内容	授業方法	分類
2	・指導の基礎：カリキュラムの二層構造 直接的指導と間接的指導（環境の構成） ・過去に必死に取り組んだことは何か、自分に影響を与えてくれた人は誰か	講義（実践事例から） 記述・提出	A D
3	・同年代の繋がり他に異年代との繋がる必要性 ・年齢・時期に応じた指導 ①（3歳児） ・実習等で捉えた各年齢ごとの特徴はどのようなものだったか	講義（前回提出を受けて） 講義（実践事例から） 記述・提出	D A C
4	・年齢・時期に応じた指導 ②（4歳児・5歳児） ・保育者となった時、子ども達にどのような価値観で接し、何を伝えたいと思うか	講義（実践事例から） 記述・提出	A
5	・幼児の遊びを一つ取り上げ、その歴史を調べる 取り上げた遊びを5領域で分析する	事前レポート作成・提出 ・発表・グループ協議	C
6	・文献の信憑性（図書かネットか） ・遊び・活動に応じた指導 ①（ルールのある遊び・体を動かす遊び） ・幼児・児童期に好んでいた遊びは何か（遊ぶ相手、場所、遊び方など）	講義（前回提出を受けて） 講義（実践事例から） 記述・提出	C A D
7	・遊び・活動に応じた指導 ②（表現を伴う遊び、自然と関わる遊び・活動） ・表現、飼育・栽培についての考えをまとめる（自分の経験を踏まえて）	講義（実践事例から） 記述・提出	A C
8	・遊び・活動に応じた指導 ③（ごっこ遊び、言葉や話に関わる遊び・活動） ・保育者に適した自分のよき、保育者として改善していく必要がある点はどこか	講義（実践事例から） 記述・提出	A BD
9	・遊び・活動に応じた指導④（生活習慣に関する活動・行事に関する活動） ・今年の自分の生活と、来年の期待をそれぞれ漢字一文字で表す（理由も）	講義（実践事例から） 記述・提出	A D
10	・保護者世代と学生との違い ・指導計画とは ・指導計画の作り方（実際の日案を例にしながら） ・教育基本法、学校教育法、幼稚園教育要領の記述テスト	講義（前回提出を受けて） 講義 基本事項に関する事前の 暗記・小テスト	BD A B

**(1) A型：「子ども理解力」の養成**

子どもを理解することは、保育実践の基本であり、中核である。養成段階において「子ども理解力」を身につけることは必須である。ここでの授業方法は、実践事例を基にした講義が中心となる。授業内容により、子どもを見とる視点は異なってくるが、いずれの場合も、複数の子どもの姿を実践事例として紹介し、その姿を保育者がどのように読みとったのかを含めて、伝えている。

**(2) B型：「専門職意識」の養成**

養成校入学の間もない時期には、「子どもが好き」「子どもは可愛い」「先生と呼ばれると嬉しい」といった気持ちで保育を志している学生も多いが、養成段階を経て、国家資格である保育士、幼稚園教諭免許状などを取得し、卒業することになる。養成期間を通して、「専門職意識」をもつこと、つまり保育のプロとしての責任を自覚することが必要である。ここでの授業方法は、保育を経験した立場から、保育の意義、やりがいなどを伝えていく講義が中心となる。社会的にその専門性が認められているとは言い難い状況も含めて伝えていく中で、学生が「保育」とは何をする職かを十分意識できるように働きかけている。学生が不安に感じる勤務状態などについても適宜答える機会をもつが、その際、子どもの育ちを保障することが保育専門職の基本であることを念頭に置いている。

**(3) C型：「自ら考える姿勢」の養成**

保育の専門家として必要な資質の一つに「自ら考える姿勢」がある。学生の中には、受け身的な姿勢で与えられた課題をこなしていく経験は多くあっても、自分で考えたり創造したりしていく経験の乏しい者もいる。保育は、決められた課題を子どもに与えるのではなく、子どもの生活を子どもと共に作り出していくことである。保育者自ら考えることが身につけていなければ、保育をすることはできない。ここでの授業方法は、決まった正解が必ずあるテーマではなく、学生それぞれが自分なりの考えを巡らすことのできるようなテーマを提示することが挙げられる。そのテーマについて、授業内で回答してもらったり、記述・提出してもらったりすることで、考える機会を作っている。また、一人の考えに留まるのではなく、学生同士が互いの考えを出し合い、聞き合う場を設定することも行っている。自分とは異なる考えにふれ、互いの良さを認め、学び合うことで、さらに個々の「自ら考える姿勢」に繋がることを期待しての授業方法である。

**(4) D型：「自らを振り返る力」の養成**

保育における評価は、子どもを評価することだけでなく、子どもの姿を通して、保育者自身の指導を評価するところに特性がある。保育者には「自らを振り返る力」が欠かせないのであり、絶えず自分の保育を振り返り、保育者としての姿勢を問い続けていかなければならない。ここでの授業方法は、過去、現在、将来に渡る時間軸の中で、自分の生活を問い直せるようなテーマを設定し、各自が自分を見つめ直す機会を作ることが中心となる。

表5 授業の類型化

分類	学生に養成したい資質	授業の方法
A型	子ども理解力	・実践事例に基づく講義
B型	専門職意識	・保育経験に基づく講義 ・学生の疑問に対する保育経験からの応答
C型	自ら考える姿勢	・学生が考えを深められるテーマ設定 ・小グループの中で討議、発表の機会設定
D型	自らを振り返る力	・学生が自身のことを振り返られるテーマ設定

### Ⅲ 分析2—学生の自由記述からの検討

#### 1 方法

授業終了時に、学生に授業の感想等を自由記述してもらった。その記述内容を、分析1で捉えたA～D型の授業内容が、学生にどのように伝わったかという視点で分類した。

#### 2 結果

##### (1) A型（「子ども理解力」の養成）に対する反応

○子どもに対し新たな発見ができてとても興味深かった。  
○実際の子どもの話がすごく印象的だった。  
○現場であったことや子どものリアルな姿が伝わってきて本当に面白かった。  
○子どものことなど実体験に基づいた話が多かったので、とても参考になった。  
○子ども達の話をとくさんして分り易かった。  
○子ども達のありのままの様子が分かり、具体的に状況を把握しながら受けることができた。  
○先生が体験した保育を語ってくれるので、子どもの姿が目に見えてくるようで楽しく聞くことができた。  
○現場でしかわからない子どもの実情などが聞けたので、すごく勉強になった。  
○現場での子ども様子など、リアルなお話が聞けたことも良かった。  
○子どもの行動一つひとつには全て意味があることをはじめて学んだ。  
○授業を通して、はじめはただ子どもたちと元気に笑顔で遊ぶ保育者になりたいと思っていたけれど、毎時間の先生の話や子どもたちの事例を聞いて、私も子ども達の疑問や好奇心と向き合いたいと思うようになった。  
○とても難しかったけど、一番子どもに近いと思える講義だった。  
○障害のある子に謝ったという話がとても印象に残っている。保育者がきちんと謝るということは、なかなかできないことのように思う。子どもと向き合うということは、実はそういうことなんだと思う。

##### (2) B型（「専門職意識」の養成）に対する反応

○保育の現場での話が多く、園での子ども達の様子や保護者や他の先生方との関係など、普通の大学の講義ではなかなか聞けない話をしていただき、参考になった。  
○現場は楽しいようで厳しいのかと感じた。  
○子どもと接する職業の良い面も悪い面も全てについて話が聞けて良かった。  
○現実的なことをたくさん聞けて良かった。  
○現場についていろいろと知れて良かった。  
○今までの授業ではあまり感じなかった現場に出る難しさみたいなものを感じた。  
○実際の園での子どもや保護者、保育者の話が聞けて良かった。  
○子どもに関する知識と共に、社会的、道徳的なことが学べたと感じた。  
○現場で役に立つ話をたくさんしていただき、とてもためになった。  
○実際に現場で働いている生の声を聞いていろいろと勉強になった。  
○実際の保育の現場でのやりとりを聞く機会はあまり無いのでよかった。  
○保護者にはどんな人達がいるか、実際現場で働いている先生のお話だからこそ今後に生かすことができる内容が多くてすごく良かった。  
○私にとってとても意味のある時間だった。はじめは自分の考えの甘さに落ち込み、自信を無くしたが、今はとても前向きに講義を受けることができている。大変だけどそれでもつきたい仕事だと思える。  
○保育という仕事について、正直、これほど素敵な仕事だとは思っていなかった。自信を持って就職につき、生涯勉強していきたいと思った。  
○保育の奥深さを感じた。もっといろいろなことを学びたいと強く感じた。実際に読む本の冊数が変わってきた。

### (3) C型（「自ら考える姿勢」の養成）に対する反応

- 保育についてとても考えさせられた。
- 「保育とは」ということについてたくさん考えることができて良かった。保育はとても奥が深いと感じた。
- 「保育」一言といえども、奥深く、簡単に保育士になりたいとは言えないと思った。
- 時には厳しい現実的な意見で教えていただけて、自分なりに考えさせられることも多く、保育について本気で考えることができた。
- 自分で考えてみる時間が設けられていたので、普段は考えないようなことでも考えてみることができた。
- 保育観が少し変わった。
- 大学生として、保育士を目指す者として、本当に考えなければならないことが多く見つかった。
- 考えさせられること、得ることが多く、保育士になるために必要なことはもちろん、人間としても成長できるような授業だった。
- 授業の度に、自分でよく考えることができたと思う。
- 他の先生は教える授業だが、先生の授業では考えることができた。
- もっとたくさん考えながら行動すべきなのだと感じた。
- この授業は考えることが多いなと感じている。答えが出なくても考えて進んでいくことが大切だと気づいた。
- この授業を受けて、保育のことを考えることが多くなった。
- 教科書などで習うような授業ではなく、自分自身でいろいろなことを考えさせられた貴重な体験になった。
- 自分で考えるということを意識していきたい。
- 講義を受ける前は、知識ばかりで具体的な保育者像や、理論がどのように現場で繋がっていくのか全く分からなかった。毎回の講義で考えてレポートを書いていくうちに自分なりの答えが見つかり、今受けている全ての講義の大切さをつくづく感じるようになった。
- こんなに考えることを求められる講義はなかった。本当に難しく悩まされた。保育の魅力と難しさについて考えさせられる講義だった。

### (4) D型（「自らを振り返る力」の養成）に対する反応

- 授業を通して自分を省みるような時間だったと思う。
- 保育についてはもちろん、人としてどう生きるかを学べたと思う。
- 自分自身について見直す機会となった。
- 保育に関わることだけでなく、人生観が変わるような深い話を聞かせてもらった。
- 「自分で考える」ことができ、少しでも成長できたように思う。
- 子どもの姿だけでなく、自分自身について考える時間を持てたことが良かった。
- 自分のことを知ることができ、有意義な時間もすごすことができた。
- もっともっと自分を見直して、まずは自分から変えていくことが必要だと思った。
- 気づかされたことは、あまりにも自分について知らないということである。自分を知らないということに今気づけたことは本当に自分のためになった。
- 自分を見つめ直すという視点から子どもの現状と結びつけていく具体性があり、実感の湧く授業だった。
- 子どもについてだけでなく、自分についてもいろいろ考えさせられる授業だった。
- 自分と照らし合わせたり、見つめ直す機会になっていた。
- 保育士としての基本だけではなく、私たちが生きていく時の基本のような気がした。
- 自分自身について考える機会が多かった。まず自分という人間を理解しなくてはならないと思った。
- 社会人としての常識や人間性などについても学んだり考えたりすることができて、とても良い機会になった。
- 保育者としてはもちろん、それだけに留まらず、一人の人間として人と関わることにたくさん関わったように思う。
- 保育についてだけでなく、自分のことを見直すきっかけとなった。余裕を持っていろいろなことを考えたい。
- 自分自身についてフィードバックする時間と機会を与えてくださったような気がし、その大切さに気づいた。
- 子どもと接する前に、自分のことをよく理解しているというのも大切と感じた。
- 深く考えることの大切さを知った。講義を受けているつもりが、実は自分を見つめ直す機会となっていた。
- 残りの学生生活を大切にしながら、まずは自分自身の生き方を見つめ直してみたい。

## IV 考察

### 1 実践事例に基づく「子ども理解力」養成の在り方（A型の授業）

#### （1）事例に基づき「子ども理解力」を養成する意義

実践事例を核とすることで、「実際の子どもの話がすごく印象的だった」「子ども達のありのままの様子が分かり、具体的に状況を把握しながら受けることができた」など、子どもの姿を身近なこととして捉えることができた学生が多くいた。これは、授業者が実践を再現し、学生の反応を見ながら言葉を置き換え、より子どもの姿を具体的に伝えたためであると考えられる。また、テキストに掲載されているような、切り取られたある部分の子どもの姿で終わるのではなく、繋がりをもった縦断的な子どもの姿として伝えたためではないか。津守は、「保育者として、研究者として、想像を働かせて、その見方をつくってゆくことが必要であると共に、その見方の妥当性を確かめるのに、長期に渡る縦の資料を得ることは最も着実な方法である」と指摘し、「一つの場面の体験によって、その出来事の子にとっての意味を考えることができるが、それは何日、何週間、何か月、何年にも渡る縦の資料によって確かめられ、全貌が明らかになってゆく」と述べている<sup>10)</sup>。子どものある一場面を読み取ろうとする場合、切り取られた事例だけでは必ずしも子どもを理解したことにはならない。実は切り落とされてしまった表現や、その後の行動も含めてその子の気持ちを捉えようとするのが、「子ども理解」に繋がる。多くの実習生や新任の保育者が、技術的なかかわりだけでは通用しないと感ずるのはこのためであると考えられる。保育者は、いくつもの場面を縦断的に捉え、かかわりを模索し、働きかけている。保育の営みは、この積み重ねであるとも言える。さらに、授業者は実践事例に基づき、空間的、時間的に、保育者の思考の再現をも試みることで、学生は自分と異なる捉え方に気づき、保育の難しさや深さを感じる。「子ども理解」が保育の中核であることを学生自身が感じ、その必要性を見出し、それが、保育者を目指す意欲や学習意欲へと繋がり、さらには保育者としての基本的な資質向上へと繋がるのではないか。

#### （2）事例に基づき「子ども理解力」を養成する上での課題

実践事例を核として、授業をする上での課題を二点挙げる。第一は、実践事例をいかに教材化するかという問題である。保育実践は、地域や園の実態に応じて行われるものであり、多様な取り組みがある。保育経験を持つ授業者がこれまでどのような地域、園、学級（年齢）を担当していたかによって実践事例に違いが出てくる可能性は大きい。授業において実践事例を扱う際にはきちんと養成のための教材化を行わなければならない。津守は、ある子どもについての一回限りの体験であっても、人間の本質に触れるものであれば、形を変えて異なった場面異なった子どもにも表れると述べている<sup>11)</sup>。授業者のもつ数ある実践事例の中から、横断的、縦断的に共通性を探り出し、一定の理論化をすることで、実践事例が「子ども理解力」に繋がる教材として活かされるものとする。第二は、講義形式以外の授業との関連である。保育実践を授業者の言葉を通して伝えることで、学生の「子ども理解」が深まることはあるが、実際に保育現場に身を置き、自身で保育実践をしなければ見えない、感じられないことも多い。実践事例を基にした授業で伝わることはどのような点か、反対に、それだけでは伝わりにくい点はどのような点か、再度整理しなければならない。その際、養成課程全体の中での実習の位置づけ、養成段階と保育



者になってからの研修体制との連携などについても、併せて検討していく必要があるだろう。

## 2 保育経験に基づく養成の在り方（B・C・D型の授業）

### （1）保育経験に基づき「専門職意識」「自ら考える姿勢」「自らを振り返る力」を養成する意義

授業当初の学生の多くは、保育者という職業を簡単なもの、誰でもできるものといった捉え方をしていた。しかしながら、授業を通し、「はじめは自分の考えの甘さに落ち込み、自信を無くしたが、今はとても前向きに講義を受けることができている。大変だけどそれでもつきたい仕事だと思える」と、職業意識について捉え直せた学生がいた。これは、保育経験のある授業者が保育という職業に対してのやりがいを強く感じており、難しさの中にも保育の魅力を伝えることができたからこそであろう。

保育者は日々保育を組み立てるが、保育の難しさは、常に保育者自らが目の前の子どもを感じ、考え、その子どもに合わせ組み立て直す過程にある。「自分で考えるということ意識していきたい」「授業の度に、自分でよく考えることができたと思う」といったように、考えることについての楽しさを感じた学生も多くみられた。要因としては、考えることを授業内で保障したこともひとつではあるが、そもそも保育という営みが保育者の思考過程と切り離すことができないことを、保育経験に基づく授業の中で学生が感じたためではなかろうか。保育は、常に自分を振り返り、その人生観、人間観、保育観等を再構築していくことが求められる職である。養成段階において、学生自身が自分で考えることの必要性と重要性に気づけたことは、保育者の基本的な資質として重要であろう。

### （2）保育経験に基づいた養成の課題

現在、保育者養成校では、常勤・非常勤を問わず様々な立場、経験を持つ教員が、養成に携わっている。保育実践とのスタンスにも、それぞれの特徴がある。森上は、従来の研究者の課題として、研究者の行う実践に基づく研究は「間接的には実践に示唆を与えてくれることはあるだろうが、それは研究者の一方的な興味によって実践のある部分を切り取ったものであり、実践者の問題意識とは大きくかけ離れている場合が多い」<sup>12)</sup>と述べている。一方、実践者の課題として、実践に密着した研究になるほど個性が強くなり、一般化、普遍化を阻む性質があると指摘している<sup>13)</sup>。保育実践者を出発とする養成校教員は、その点を十分認識しながら、養成に関わらなければならない。津守は、一つの行為には特定の子どものその場面の「独自の意味」と「普遍的意味」とがあるとしている<sup>14)</sup>。「独自の意味」を丁寧に積み上げながら、さらに「普遍的意味」を教員自ら構築して、初めて、学生に保育を伝えることができるのであろう。個別的な子どもの紹介にとどまるのではなく、一般化、普遍化した姿として、学生に伝えていける力量を身につけるべく努めていきたい。

冒頭にも述べたように、保育の質の向上において、保育者の資質向上は欠かせない。これまでも、保育者の資質向上については様々なところで指摘され、現在もいろいろな取り組みが行われている。これを、保育者養成に置き換えて考えれば、保育者養成の質の向上に欠かせないのは、養成校教員の資質向上である。このことを自覚した上で、研鑽を積んでいきたいと考えている。

注) 授業者の属性は以下の通りである。

授業者A：私立保育所保育士として勤務後、2007年より保育者養成系私立大学に勤務。

授業者B：国立幼稚園教諭として勤務。2007年より私立大学保育コース非常勤講師を兼務。

〈文献〉

- 1) 文部科学省「幼児教育振興アクションプログラム」2006
- 2) 厚生労働省「保育所保育指針」第七章 2008
- 3) 「子どもの権利条約」(原文英語：Convention on the Rights of the Child)
- 4) 子どもの権利委員会「一般的意見7号：乳幼児期における子どもの権利の実施」2005  
(原文英語：CRC/C/GC/7、日本語訳：平野裕二)
- 5) 欧州評議会閣僚委員会「デイケアについての加盟国に対する閣僚委員会の勧告」2002 (原文英語、日本語訳：平野裕二)
- 6) 森上史朗「保育研究の在り方をめぐって－実践研究を中心に－」『保育学研究』第31巻 pp.192-201 1993
- 7) 秋山和夫「保育研究の課題と方法をめぐる試論－教育学の立場から－」『保育学研究』第33巻第1号 pp.78-88 1995
- 8) 厚生労働省「保育所保育指針」第四章 2008
- 9) 文部科学省「幼稚園教育要領」第3章 2008
- 10) 津守真「おとなとこどもの接点－保育研究の方法について－」本田和子・津守真共編『人間現象としての保育研究3：保育現象の文化論的展開』光生館 pp.176-177 1997
- 11) 同上 p.177
- 12) 森上史朗「保育の質を高める実践研究（総説）」『保育学研究』第34巻1号 p.9 1996
- 13) 同上 p.8
- 14) 津守真『保育者の地平』ミネルヴァ書房 p.91 1997